

通信教育部メディアスクーリング  
経済学（2017年度撮影）

# 経済学

## （資本と利子から経済を考える）

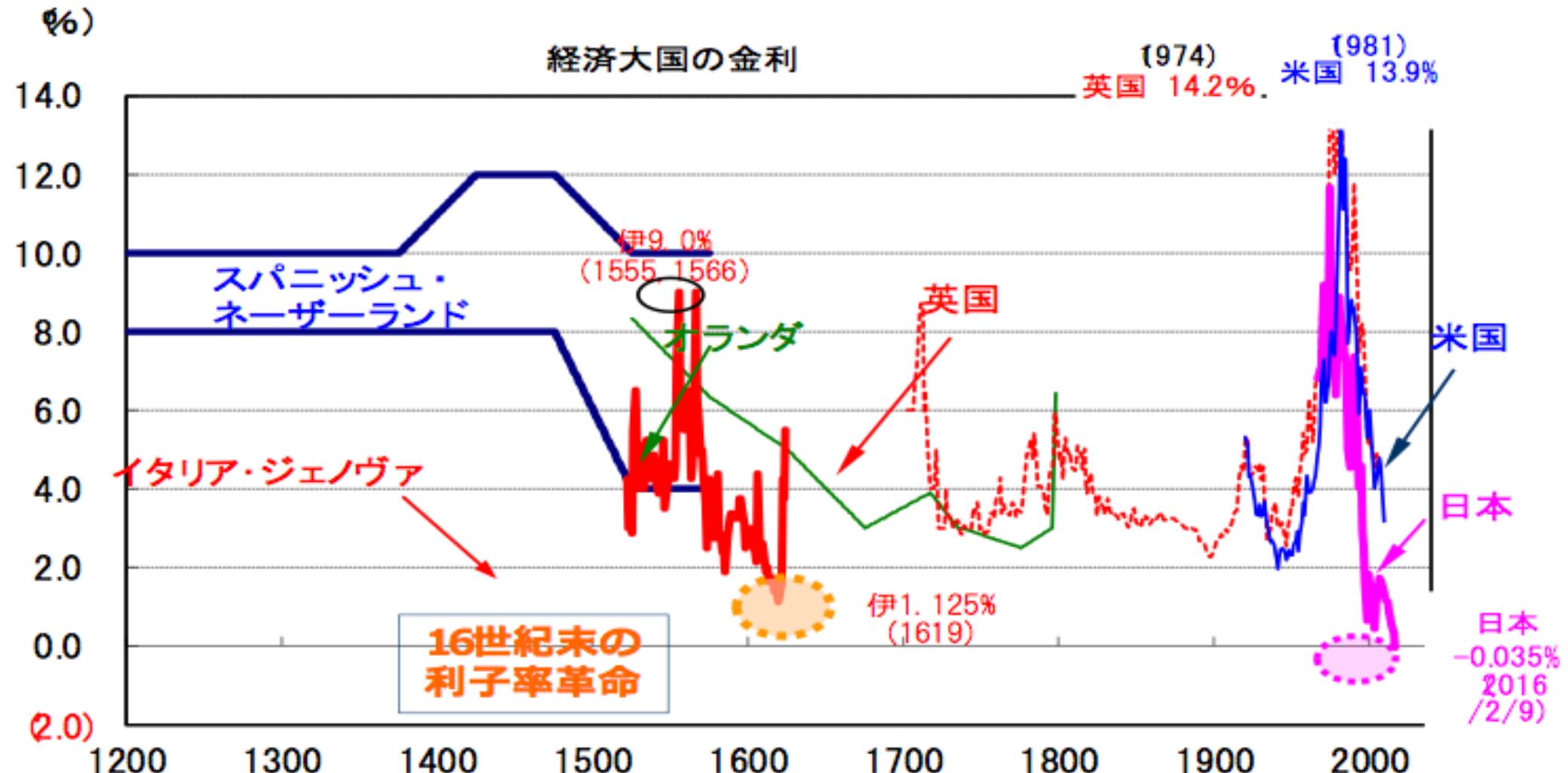
### 第4回

法政大学 法学部  
水野和夫

# 第4回目のテーマ

- ▶ 利子率の5000年の歴史
- ▶ 利子率について

# 過去5000年で前例のない日本とドイツの「ゼロ金利」



出所)SDNEY HOMER "A History of Interest Rates"

21世紀の利子率革命

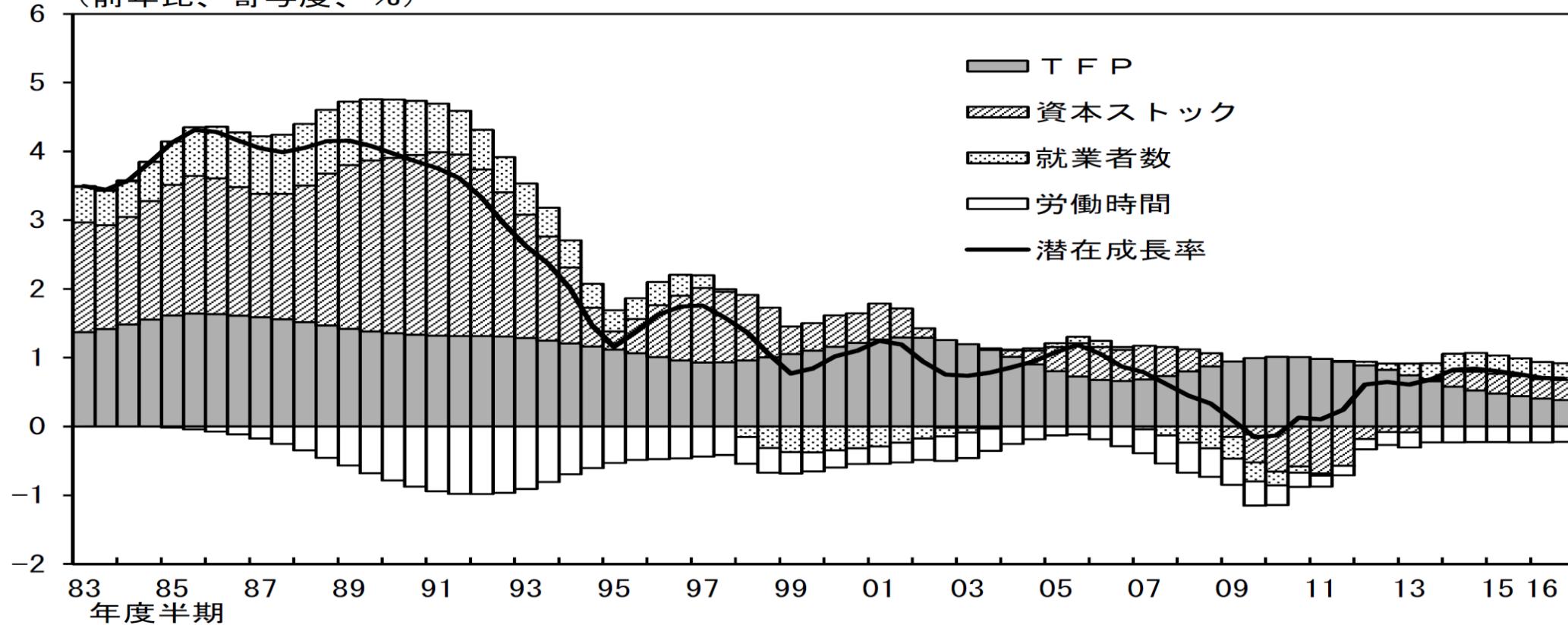
- ①名目利子率 = 実質利子率 + 期待インフレ率
- ②長期自然利子率 = 潜在成長率  
(注) 『自然利子率について：理論整理と計測』(日本銀行、ワーキングペーパー、2003年)

# 日本の潜在成長率

[HTTPS://WWW.BOJ.OR.JP/RESEARCH/RESEARCH\\_DATA/GAP/INDEX.HTM/](https://www.boj.or.jp/research/research_data/gap/index.htm/)

## (2) 潜在成長率

(前年比、寄与度、%)



- (注) 1. 需給ギャップおよび潜在成長率は、日本銀行調査統計局の試算値。  
2. 短観加重平均D I（全産業全規模）は、生産・営業用設備判断D Iと雇用人員判断D Iを  
資本・労働分配率で加重平均して算出。なお、短観の2003/12月調査には、調査の枠組み見直し  
による不連続が生じている。  
3. 2016年度下半期は、2016/4Qの値。

(出所) 内閣府、日本銀行、総務省、厚生労働省、経済産業省、経済産業研究所

利子とは・・・「流動的な資産である貨幣を手放すことに対する報酬である。」（ケインズ）

## 利子と資本の関係・・・二面性

- ▶ ①  $Y = F(K, L)$

$Y$ :生産物、 $K$ :資本、 $L$ :労働投入量

$$K \rightarrow Y$$

- ▶ ②  $Y$  の一部である設備投資 ( $I$ )  $\rightarrow I = \Delta K$

$$K_t = K_{t-1} + \Delta K_t - \alpha \cdot K_{t-1}$$

「利子の誕生」(根岸隆)日経新聞2003年4月7日~

(『マネーの経済学』(第二章 利子の誕生、根岸隆)、日経新聞社編、2004年)

### 1.利子を取ることはなぜ許されるのか(p.30~)

お金がお金を  
生む

お金を借りると利子を払わなければならない。たとえば、ボーナスが出るまで待てなくてチワワを買うためにお金を借りると、借りたお金(元金)はボーナスが出たときに返せばよいのであるが、それまでは通常、毎月、元金に対する利子を支払わなければならぬ。逆に、お金があれば利子が稼げる。つまり、お金がお金を生むのである。  
お金とは何か。(略)単なる金の塊や一片の紙がどうして利子を生み出すのであろうか。

貨幣的な利子  
vs. 実物的な利子

しかし、金銭貸借に際して利子が発生するのは、つまり貨幣(カネ)的な利子が存在するのは、実はその背後にある経済社会の実態的な活動、つまり労働、土地、資本などの資源を用いて、いろいろなものが生産され、消費されていく際に、必然的に実物(モノ)的な利子(報酬)が発生するのを反映しているのである。

したがって、貨幣的な利子の善悪を議論する前に、経済社会においてなぜ実物的な利子が発生するのかどうしてそれが必要なのかが解明されなければならない。

社会経済の実物面においては、実物的な生産物が賃金として労働(者)に地代として土地(所有者)に、そして資本利子(利潤)として資本(所有者)に分配される。つまり、利子についての考察は貨幣的な利子ではなく、まず実物的な資本利子の考察から始める必要があるだろう。

## 2.利子は悪いものだった(p.32~)

アリストテレス  
(紀元前384-  
322)

利子に関する議論は古くからある。  
たとえば、ギリシャ時代の大哲学者、アリストテレスは次のように考えた。(略)ものは決められた用途に従って使うのが正しい。  
貨幣はそもそも交換を媒介するのに使うべきものである。物々交換は不便である。自分が欲しいものを持っている人が自分の持っているものを欲しがるとは限らない。  
そこで、まず自分のものを誰でも欲しがる貨幣に換え、次に貨幣と自分の欲しいものを交換すればよい。お金はものの売り買いを助けるために使うのが正しい。お金を貸して利子を取るというのは、お金の用途としては正しくない、と。

キリスト教の  
教え…利  
子は厳禁

キリスト教の聖書でも、利子を否定する教えが多く見られる。たとえば、ルカ伝には「しかしあなた方は敵を愛し、人によくしてやり、また何もあてにしないで貸してやれ」と書かれている。つまり、お金を貸してもよいが、利子をあてにしてはいけない、利子はいけないのだという教えである。

トマス・アキ  
ナス(1225  
頃-1274)  
『神学大全』

利子を禁止する教義をローマ法の代替性( 同種のモノが存在し、それとの交換が可能かどうか )という概念により理論的に基礎づけようと試みた。

家屋(代替性のない)→使用料としてその間の家賃を払わなければならない。

小麦(代替性がある)→同量の小麦を返済するだけでよい。

貨幣の場合も同じで、借りて使ってしまった貨幣と返す貨幣は同じものではないから貨幣同士の交換として同額を返せばよく利子は要らない、と。

このような、経済学が始まる以前の利子についての考察は、力ネとモノとの区別、利子と使用料との関係がまだ揮然としていることが特徴であったといえよう。

### 3. 貨幣はべールのようなもの？(p.33～)

アダム・スミス(1723-1790)

経済学は十六世紀から十八世紀のヨーロッパ諸国における重商主義に始まるといえる。

重商主義者の中には、一国の国富はその国が保有する貨幣あるいは金の量で表されるとする重金主義者も多かった。このような考え方に対して、経済学の学祖であるアダム・スミスは、その主著である『国富論』(1776年)において激しく批判する。

「富が貨幣あるいは金銀に存するということは、貨幣の二重の機能、つまり商業の用具としてのそれと、価値の尺度としてのそれから、自然に生じてくる通俗的な見解である」(大内兵衛・松川七郎訳、岩波書店)

そして通俗的な貨幣的国富観を排したスミスは、国富とは労働生産物であるという実物的国富観を提唱する。「あらゆる国民の年々の労働は、その国民が年々に消費するいっさいの生活必需品および便益品を本源的に供給する資源である」(大内・松川訳)

## 「貨幣ベール観」

したがってスミスは、貨幣は財の交換を媒介するだけで、それ自体は実物経済に対して積極的には影響を与えないとする**「貨幣ベール観」**を提示したともいえるわけで、それ以後の経済学が貨幣的経済学ではなく実物的経済学として発展するのに手を貸したことになる。

事実、スミス以後の経済学は、(略)つまり、貨幣額で表示された絶対価格ではなく、実物的な財と財の交換比率である相対価格を、貨幣を考慮に入れないで説明する。

利子についても、貨幣の貸借に伴う利子ではなく、実物的な資本用役(資本財によるサービス)と他の財との間の相対価格である資本利子を、貨幣の存在を無視して考察するのである。

資本利子とは、たとえば漁業の場合、漁夫の分け前(賃金である魚)に対して、船や網の持ち主の分け前、つまり利潤である魚にあたる。

## 4. 利子はお金の使用料か

ベーム・パヴエルク(1851—1914年)の「資本利子」

インセンティブ

時間選好

迂回生産の有利性

漁船や漁網の持ち主が分け前として得る魚として例示した資本利子(資本財サービスの提供に伴う利潤)の徹底的、包括的な研究はベーム・パヴエルク(1851—1914年)に始まる。古典派経済学に対して近代経済学が始まった限界革命の三大経済学者の一人で、オーストリア(ウィーン)学派の開祖であるメンガーの高弟

彼は利子が存在する原因を三つ挙げている

- ① 第一の原因是、人々は将来より豊かになると予想するということで、若い医学生が例に挙げられている(合コンで医学部がもてるのは現代の日本だけではないようだ。)そう予想する人々に貯蓄させるには利子というインセンティブ(
- ② 第二の原因是、人々が近視眼的で将来の欲望を現在の欲望より低く評価するということで、時間選好といわれる。この場合も、消費に走らず、貯蓄するには
- ③ 第三の原因是迂回生産の有利性で、時間もかけて道具を作れば、労働の生産性が高くなるということである。素手で魚を捕るよりも、コストをかけてでも網を作つて魚を捕れば、よりたくさん捕れるであろう。

何となくわかるような気もするが、これらの原因がどう作用して、利子が存在することになり、利子率がゼロではなく正の値になるのか。この問題を解明するには貯蓄の需要供給、貯蓄と投資の関係を考えなければならない。